

宝生流昭和版の詞章を主とした語法の検討

前 田 正 民

伝統を賞ぶ能楽謡曲の詞章も、現行のものは流儀によって随分異同があり、その語法假名遣上の誤は各流とも少なくない。それは演能謡謡の合本体的のもので、演技上大して支障を感じぬため、余り字面に関心をもたれぬからであろう。それでも一般文学の発展に伴ない、明治以来、謡い方に變動を与えぬ限り、大分改訂されて来ている。尤も語法的には非常に無理なものも、伝統を重んじて全然改められていないものが多いのである。宝生流では、永く寛政版のものが行われていたが、大正八年に改版され、節附なども余程細かに手が加えられ、本文は芳賀矢一博士が監修されたことになっている。更に昭和三年には字体も読み易く、節附も著しく合理的に改訂され、現在は専らこれが使用されている。勿論謡い方が変わったのではない。今この昭和本について見ると、芳賀博士監修によるといいながら、当然改められて然るべきものが大分見落されている。そこでそれらの誤っているものを拾い集め、更に特殊な語法のものなどを纏めて見た。語法といっても、中古の語法に基づいたもので、語法も広義の語法である。

なお以下寛政本というのは、寛政版宝生流、昭和本というのは前

記の宝生流のもの。観世流についても随時照合、喜多流も間々照合して見た。観世流の現行本は二三種あるようだが、大正十五年三版発行の検査店のもの、喜多は大正七年訂正六版の江島伊兵衛発行のものによる。

甲 当然改められるはずのもの

一、いつもの如く歌ふて(東岸居士) 目を逐ふて(松尾) 風を

逐ふて(老松) 面汚しと思ふて(春栄) 西岸にそふて宿

す(八島) やがて問ふて・余所の様に問ふて(百万)

国里を問ふて(三井寺) まふては数へ(花月) 乱舞まふ

て(柏崎) 一さし舞ふて・舞まふたる事は(自然居士)

排まい給ふたか(国栖) 泣いつ突ふつ(調伏曾我)

○「歌ひ」・「逐ひ」・「そひ」・「問ひ」等のう音使だから、

「う」とあるべきである。

二、千秋さむらはふ・一舞まはふ(翁) 悟の道に入らふよ(卒

都婆小町) 天の鼓を打たふよ(天鼓) うち返して賜はら

ふずる(国栖2) 縮をつかふずるにて候(三井寺) まゐ

らふれんげりや(翁)

○さむらはん・まはん・入らん等の「ん」のう音便、「う」とすべきである。

三、御車近ふまありて(花筐)

○「近く」の、う音便故、「う」とあるべきである。

四、北庭薬をまうとかや(放生川)

橋の行桁を隔て、戦う(頼政)

○「舞ふ」・「戦ふ」の終止形故、「ふ」とすべきである。

五、瀬田よりまわり合いて(兼平)

○「合ふ」・「拌まふ」の連用形だから「ひ」とすべきである。

観世は以上の中、因栖の「拌まい給ふたか」は「拌まい給うたか」となっている外は、宝生と同文句の所は、皆正しい仮名遣になっている。但し「頼政」に「こゝを最後と戦うたり」の句があるが、宝生は「戦うたり」と正しくなっているのに、観世の方が「戦ふたり」となっているような例もある。

六、舟より下りやうずると申すか(七騎落)

○謡う時はオリョオと謡うのであるが、これは「下り」に「う」の変じた「よう」がついたもので「下りよう」と書くべきものである。観世では「七騎落」に一箇所出ているが、「おりようずる」としてある。但し宝生でも寛政本「自然居士」では「おりようずる」となっている。

七、君を重むじ(錦戸)

○「重みす」の音便、「重んじ」とあるべきもの。

八、物の名も所によりて変るよなふ(齊刈)

なふ(兼平)

○呼びかけの「なう」(ノオ)が語句の後についたもの。「なう」とすべきである。

呼びかけの「なう」は謡曲中に非常に多いが、右例の外は皆「なう」になっている。

九、おふ曠野人稀なり(求塚)

○これは「おう」とすべきで「女郎花」には「おう曠野人稀なり」とある。

十、をとなしやかに(隅田川)

○「おとなしやかに」とすべきもの。

十一、あらたうとや(実盛・熊野)

○「たふとや」とすべきもの。「養老」には、「御影もたふとまば」とある。

十二、岸に生てふ花ならば(梅枝)

○生てふと「ふ」を送るべきである。寛政本では送假名を省略したものが非常に多いのだが、昭和本はこのような場合には殆んど補ってあるのだが、これは落ちてゐる。

十三、かさねてしほれとや(海人)

袖をしほるぞ恥かしき(大

原御幸) 互に袖をしほるらん(輝丸) 我が袖をしほりか
ねたる(大仏供養)

○「姿る」(しをる)を「しほたる」と混同し、「絞る」(しほ
る)にかけて誤ったものか。観世も「しほる」となっている。

かざしの花もしをしをと(羽衣) 心の花もしをしをと(千
手) 猶しをり行く(野宮・玉葛) 御袖もしをるばかりに

(当麻) しをるゝ露の(花筐) しをるる袖の(千手)
花しをれ(松垣) うちしをれてぞ(湖仲) しをれぞ増る

(天鼓) などは「を」になつており、「露分け衣しほたれて」
・「さも馴れ衣しほたれて」(木賊)などは正しい。

十四、頼みもあやうからぬ(土車) 心も危うき(天鼓)
御命もあやうく(楊貴妃) 危うきかけぢの(護法)

○「危し」はあやふしと「ふ」であるべきを「う」にしてある。
観世は仮名書の処は正しく「ふ」となっている。

十五、きりはたりちやうちやうきりはたりちやうくきりはたりち
やうく(錦木) きりはたりちやうきりはたりちやう(松虫)

○「ちやう」は、音をたてて物の打ち合うさまという語で、漢字
では「丁」の字をあてて、古くから「ちやう」としているが、

「松虫」には観世も「ちやう」と書いてある。

十六、其形らうたけて(横山)
○「らうたく」は、らふたく(臘長く・蔦長く)であるべきだの

に、室生・観世共に「らうたく」になっている。

乙 以下伝統的に誤つたまま用いられているもの、誤でなくても今
日の書き方と異なつて耳だつものを列挙する。

一、雨始めて晴れり(羽衣)

○「り」は四段活用已然形とサ行変格活用の未然形だけに連続
するものであつて、「晴る」は下二段活用であるから、「晴れり」
は誤であり、語法の誤の例によく引用されている。「関寺小町」
に、「緑漸く垂れり」の例があるが、「垂る」は、普通下二段活
用として使われているけれども、古く四段活用としても使われて
いるので、これは誤とは言われない。

二、知らで吟じし古ることながら(藤)

不便には存じしかども(藤戸)

○「吟ず」・「存ず」はサ行変格活用だから「し」へは未然形か
ら続くべきで、「吟ぜし」「存ぜし」であるべきである。観世で
は「藤」の方は「吟ぜし」になっているが、「藤戸」の方は「存
じし」になっている。

右の他はすべて正しく書かれている。

松の名たてと詠ぜしは(藤) 業平の友とせし(井筒)

勘当せしに(小袖曾我) 心がはりせし程に(大原御幸)

及第のみぎんに亡ぜし・我と亡ぜし悪心を(鐘道)

三、君とかはせし陸言の(楊貴妃) 秘蔵におぼせし御内の人

(撰待) 契約申せしなり(大江山) 年二十五と申せしに

(須磨源氏) 豊成公と申せし人(当麻) 佐野にて申せし

よな(鉢木) ある人の申せしは(大原御幸)

○四段活用の場合「し」は連用形から連なるのであるが、これらは已然形から連なっている。但しこれは文法上の許容事項で認められているのであるが、謡曲で本来の連用形に連なるものと対照するため、次に本来の形式になっているものを全部挙げておく。

深く隠ししなり(藤戸) 喜びをなしし折節(生田敦盛)

孟津を渡ししに(玉嶋) 大迹迎の皇子と申ししが(花筐)

さては人の申ししも(藤戸) 出家になれと申ししを(小袖曾我)

我) 一月の頃申しし如く(熊野) 落さんと申しし折節

(大原御幸) 仕へ申しし御童(撰待) 此子三歳と申しし

時・秦の氏女と申しし人(加茂) 小野の頼風と申しし人(女郎花)

融の大臣と申しし人(融) 忠度と申しし人は(忠度)

玉藻の前と申しし人の(殺生石)

失はれまらせし(藤戸)の如きは「まららす」は下二段活用だから、勿論正式のものである。

四、迎ひに参るべし・迎ひに参らんと(撰待) 御迎ひに参じたり(忠信)

御迎ひに参りて候・御迎ひに上り候(熊野)

我が君の御迎ひとや(忠信) 御迎ひの人々・都より御迎ひ下さり(花筐)

御酒迎ひと申すか・御酒迎ひの為に(藤巻)

○「迎ふ」は下二段活用であるが、その連用形が「迎ひ」になっている。これは他の文献にも随々見るところである。正しく用いられているものを次に掲げておく。

迎へさせ給へと(清経) 送り迎へて(西王母・関寺小町・藤)

送り迎へし(呉服) 送り迎へしに(生田敦盛) 年を迎へて(松尾)

浄土に迎へ給へと(錦戸) 迎へ給はば(加茂)

西方にむかへゆく(当麻) 道迎への其ために(俊寛)

五、例あしし(小袖曾我) 或はお主子は借しし(満仲) 龍

愛甚ししと申せども(昭君) おう嬉しし(大江山)

あゝ由々しし由々しし(鞍馬天狗)

○形容詞の語尾が「しし」となっているものだが、今は文法上の許容事項になっている。「呉服」に「寂慮ことに甚し」と正式のものもある。

六、無垢世界に生を受くる(海人) 責めを受くる(千手)

苦を受くる(船橋) 其名を得る(忠度) 父河津殿に回向する(小袖曾我)

七百歳を送りぬる(枕慈童) とめよくとおつかくる(檀風)

琴の音添へて音づる(竹雪) 腰の刀に手づる(千手)

竹の雪を掻き除くる(竹雪) 腰の刀に手をかくる(七騎落)

此浦に船をさし寄する(松浦物語)

鎌堂の庭に立ち出づる(調伏曾我) 思ひ子を誘ひ立ち出づる(皇月)

親子伴ひ立ち出づる親子伴ひ立ち出づる(鳥追)

此御経を誦誦する此御経を誦誦する(東北・鶴) この御経を

誦誦するこの御経を誦誦する(芭蕉) 此妙経を誦誦する此妙

経を誦誦する(鍾馗) 頼みをかけて念誦する(飛雲)

春榮が形身にまゐらする(春榮) 本の小袖は參らする(自然

居士) 同じく笠をも參らする(蟬丸) 此花を折りてまゐ

らする(半部) 忍ぶ草も乱るゝ忘れ草も乱るゝ(草紙洗)

綴に取りつき引きとむる(俊寛) 絃に取りつき引きとむる

(自然居士) 又鎌倉に渡さるゝ(千手) 頼光保昌に仰せ

付けらるゝ(大江山) 弁慶を自がけてかゝりける(正尊)

笑つて左右へのきにける(景清) 生けるを放すなるその御誦

は何事ぞ(放生川) 善きを助くるその御威光を頼まんと(調

伏曾我)

○終止形が連体形となつてゐる。中には最後の二例の如く、普通
の終止形とは異なるものもある。

七、誦誦に上げたると存じ候(自然居士) 今日に当りたると候

や(賴政) 富士に討たれたると候や(富士太鼓) 打ち落

したると申し候(烏帽子折) 一旦人間に生るゝとは申せども

(花篋) 退いて帰りたると申し候(烏帽子折) 隠し置き

たるとは聞きしかども(雲雀山) まづ畏つたと申し候へ

(小袖曾我) 消えたと申し候(烏帽子折) 母上に添

ひ申したると申し召せ(夜討曾我) 御運もつきたと存じ候

(船弁慶) 遣世したるとや(箱崎) むなしくなり給ひた

るとや(清経) 判官殿に似たと申す者の候程に・ちと人に

似たと申す者の候程に(安宅) 引つ立てて行きたると申す

か(自然居士) 某が參りたると御申し候へ・左近の尉が參り

たると仰せ候へ(鳥追) 閻浮檀金なるとかや(弱法師)

橋のとだえのありけるとは(船橋) 御覽じけるとかや(大原

御幸) 住みけるとなり(野守) 照し給ひけるとかや(弱

法師) 血流れけるとなり(放下僧) 仙女の姿見えけると

なり(昭君) 古歌にも詠まれけるとなり(杜若) 入り定

まれると申す事は(高野物狂) 仰せ出さるゝとも(正尊)

尉を頼み思し召さるゝとの御事にて候(困栖?) たとひ草露

に朽つるとも(卒都婆流) 菩薩の万行に越ゆるといふ(放生

川) 幻の様に見ゆると申し候(実盛) 浅間の獄も燃ゆる

といへば(富士太鼓) この木や侘ぶると(鉢木) 説法の

座敷にあらうずると(自然居士) 御対面あらうずるとの(春

榮) 御舟よりおりやうずると申すか(七騎落) 此柳も枯

れうずると申しつるが(昭君) 御命に代らうずると申すか

(満仲) 能登の国まで指さうずると思ひしに(安宅)

蘇生させ申さうずるとの御事にて候(谷行) たとひ暮るゝと

も・暮れ過ぐるとも(松虫) 真砂の数はつくるとも(道成

寺) 真砂の数はつくるとも真砂の数はつくるとも・たとひ小

町のながらふるとも(関寺小町) 袖暫しこそぬるゝとも(松)

風) 長く乱るゝとも(東岸居士) 暫しは別るゝとも(松)

風) 未来永々を纏るとても(是界) 千度百夜を纏るとて

も(錦木) 我が詠みたりしと承る(関寺小町)

○これらは、終止形につく「と」などが、連体形に連なっているものである。

八、我が面影や見ゆるらん(俊成忠度)

○終止形(ラ変には連体形)に接する「らん」が下二段の「見ゆ」の連体形に接しているもの。「雲雀山」には「涙の色にも見ゆるんものを」とある。

九、当年中に帰国すべきと(歌占)

くあるべきと思ひなば(富士太鼓) 筑紫へひとまづ落ち行く

べきと一門申しあひしに(大原御幸) 所詮おりまじいと申す

者をおろさんより(七騎落) 討たては叶ふまじきと仰せ候か

(檀風) 何とて帰るまじきとは申すぞ(夜討曾我) 君は

其舟には御座なきと候や(七騎落) 御名のりなきと推量申し

て候・腕の強きと言ひければ(景清) 野間の内海とかやへ御

落ちあるべきとなり(朝長) 急ぎ参内あるべきとて(烏帽子

折) 御剣を打たせらるべきとの宣旨・御剣を打たせらるべき

との御事なり(小鍛冶) 大宮造りあるべきとの勅諭を(金札)

御用ひあるべきとの御事なり(天鼓) 女人の参るまじきとの

御制戒は(柏崎) 一跡をも継がせ申し度きとの念願(春榮)

狂女の持ちたる扇御覧じたきとの御事にて候(班女) 鎌倉殿

の御事も聞き召されたきとの御事にて・国の御事をば聞き召され

たきとの御事なれば(正尊) 奇瑞をなすべきとの(鍾馗)

相槌打つべき者のなきとは(小鍛冶) かゝるべきとは思はず

して(世郎) 御叱りあるべきとは存じ候へども(満仲)

人恋しいとは(卒都婆小町) 忝きなどと御賞瓶候は(芦刈)

御出であるべきなど、仰せ候は・此秋の頃下り給ふべきなど、

(烏追) 狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ(隅田川)

○形容詞又は形容詞と同形の助動詞が、その連体形から、「と」「とは」「とて」「との」「など」等に連なっているものである。

前にも言つたように、これらの中には、古典によく出る形で誤と

言われぬものもあるが、全く破格のものも少くない。次に、「と」

などが正式の終止形になっているものを参考までに挙げておく。

仏体色相の忝しとは宣へども(卒都婆小町) いとくるしとは

思へども・袖寒しとは思へども(隅君) さはあるまじと申さ

れてこそ(正尊) 秋の月を礼すとか(金札) あら嬉しと

(竹雪) 痛はしの御事や・僧都は舟にかなふまじと(俊寛)

十、中々人は思ひもより申すまじくと存じ候

○「と」が連用形に接した珍らしい例であるが、光悦本では、

「中々人は思ひも寄申まじきかと存候」観世本では、「中々人は

思ひもより申すまじきと存じ候」となっている。

十一、花も酔へるや盃の花も酔へるや盃の(西王母) 　あら嬉し

と来りたるや(竹雪) 　君が来ませるや(江口) 　罎の網に

もるべきや(火盛)

○右は連体形から「や」に連ねたもの。

必ず婦落あるべしや(俊寛) 　驚くべしや夢の世と(野宮)

林葉の秋を汲むなりや(養老) 　これまでなりや明恵上人(春

日章神) 　これまでなりやいつまでも(蟬丸) 　これまでな

りや人々よ(富士太鼓) 　これまでなりや嬉しやなこれまでな

りや嬉しやな(熊野) 　玉藻の前が所為なりや(殺生石)

夜半にもなりたりや(籠太鼓)

○右は終止形から「や」に連なつたもの。

其心浅からめや(松出) 　浄土の春に劣らめや浄土の春に劣ら

めや(采女) 　逢ふ瀬とこれを思はめや逢ふ瀬とこれを思はめ

や(米盛) 　月は雲居にかへらめや(国栖) 　我等夫婦に限

らめや(大蛇) 　月は昔にかはらめや(江口) 　此道は尽き

せめや(芦刈) 　忘れめや山路を分けて(羽衣) 　忘れめや

一樹の陰や一河の水(千手) 　忘れめや葵を草に引き結び(加

茂物狂) 　花実のをりは忘れめや・花実のをりは忘れめや(西

行桜) 　忘れめや今も名は昔男ぞと人もいふ(小塩) 　知ら

さらめや都路に・上らさらめやたと頼め(国栖) 　我が心をば

引かれめや(車僧) 　蘇武が昔の跡なれや(卒都婆流)

五衰滅色の秋なれや(俊寛) 　浅間の嶽なれや(杜若)

色々なれや紅は(雲雀山) 　眠りのうちなれや(藤戸)

百俯国の王仁なれや(難波) 　折からなれや村雨の(絃上)

げに安楽の国なれや(誓願寺) 　淡路の絵扇国なれや(草紙

洗) 　石の鳥居こゝなれや(弱法師) 　こし方なれや古へを

(雲雀山) 　簾の川上はこれなれや(大蛇) 　五節の始めこ

れなれや(国栖) 　天のむら雲ともこれなれや(小鍛冶)

四鳥の別れこれなれや(雨田川) 　頼む情もこれなれや(望

月) 　これまでなれや(巻絹) 　真に浮世の嵯峨なれや(百

万) 　秋風楽なれや(天鼓) 　道標々の品なれや(拍籥)

我が子にあうむの袖なれや・親子あうむの袖なれや(百万)

星もあひ逢ふ空なれや(天鼓) 　我等が為なれや(当麻

人は雨夜の月なれや(百万) 　猶常盤なれや橘の(雲雀山)

中々なれやもとよりも(松虫) 　天津をとめの羽衣なれや(芭

蕉) 　神松の春なれや(高砂) 　山々の春なれや(竹生島)

夢の間借しき春なれや夢の間借しき春なれや(熊野) 　山は都

の富士なれや(竹生島) 　一葉の舟なれや(清経) 　火宅を

出づる道なれや(芭蕉) 　末に続ける家なれや(舍利)

三吉野なれや花鳥の(国栖) 　物の只なれや鳥甲(富士太鼓)

神のお庭の雪なれや(田村)

○右は已然形から「や」に連ねたもの。
十二、「見う」について。

上一段活用の「見る」が「う」に連なるものについては以前に発表したことがあるが、再度記しておく。

「む」の変じた「う」は、現在では四段に活用するものだけに限り、他の活用には「よう」となって連なるのであるが、古くは「う」がすべての活用に接しているようである。謡曲では下二段に接したものは多く見えている。

御狩にいざや出でうよ（夜討曾我） 浮世の旅に出でうよ（殺生石） 丑の時詣でせうずるにてあるぞ（橋弁慶） 碓を用

意して参らせうずるにて候（碓） 討つて捨てうずるにてあるぞ・某が名を立てうずるにて候間（鳥追） 富士が行くへを尋ね

うずるにてあるぞ（富士太鼓） 此柳も枯れうずると（阳君）
右例の如きがそれで、謡う時には、イジョオ・シヨオ・チョオ・

ニヨオ・リヨオと発音する。
ところが、一段活用は「見う」だけで、

見うずるにて候（自然居士・熊野・桜川2・禪師曾我・柏崎・高野物狂）

謡う時にはミ・ウである。観世も同文のものは宝生と同じに書かれている。

一つ注目すべきは「因栖」に「あのよしの川へ放いて見よう」と

いう句があつて、観世も宝生和木も「見よう」と書いてあるが、宝生では謡う時にはミヨオと謡い、ミヨオではない。寛政版では「みう」とある。喜多流でも「見う」と書き「見う」と謡い方の記号がつけてある。みうから、みように移る過程が伺われる。

十三、さふらふ（候）と、さむらふ（侍）

共に四段活用であるが、謡う時、「候」はソオラフ・ソオライ・ソオロオ・ソオラエ、「侍」はサムラフ・サムライ・サムロオ・ラムラエとなる。

「侍」は女性の詞章の中だけにだけ用いられ、「候」は主として男性ではあるが、女性の場合にも用いられている。

仰せまでもさむらはす（摂侍） 昔わらはが知らぬ事はさむらはす（草紙洗） わらはが身の上にてはさむらはすや（山姥）

御入りもさむらはぬものを（松風） 狂へとは仰せありさむらひそ（班女） なつかしうさむらひて（松風） 恨みと更に

思はずさむらふ・なれる果てにてさむらふ・御婦りにてさむらふ（大原御幸） 更科の里に住む女にてさむらふ（嬬捨）

此葛城山に住む女にてさむらふ（葛城） 百年の姥となりて侍ふ（卒都婆小町） 常はさむらふまことには（半部） 妻や

子にてさむらふ（富士太鼓・望月） 袖をぬらしさむらふ・色外に現れさむらふぞや・松風と召されさむらふぞや・忘れてさむ

らふぞや(松風) 思ひ出でられさむらふぞや(東北)

知られさむらふぞや(梅枝) 参りてさむらふなり(撰待)

参りて侍ふなり(藤戸) 小野小町がなれる果てには侍らふなり(卒都婆小町) かやうに狂ひさむらふなり(三山)

わらはが申して侍ふなり(烏帽子折) あの波の下にさむらふ

なれば(大原御幸) 御神事をなしさむらふ所に(野宮)

今少し待たせおはしましむらへ(大原御幸) 恥をもあらは

すにてさむらへども(撰待2) 浮む事なくさむらへば(源氏

供養) 恥かしうさむらへば(草紙洗)

以上すべて女性である。そうして大部分は節付になって居り、所

謂詞(セリフ)の所は、女性でも殆ど「候」が用いられている

が、「候」でも節付になっているところも少なくない。数例を記

す。

皆是阿弥陀もありげに候(当麻) 祈らばやと思ひ候(柏

崎) これまで参りて候(源氏供養) 御尋ねまでも候まじ

(求塚) あれ御覽候へ雁の渡りて候(花筐) あれは松に

てこそ候へ(松風) 道しるべこそ候へ(花筐) 御心よせ

に召され候へ(雲雀山)

十四、又雨しげき年をも心得べき為にて候(絵馬)

○これは寛政本には「こゝろへべき為にて候」となっており、昭

和本では「心得」と漢字にしてあるが、宝生流ではココロエベキ

と謡っている。観世本には「心得」と書き、ココロウと振仮名を

し、ココロオと謡う符号がつけてある。喜多本には「こゝろうべ

き」と仮名書にしている。ココロエベキと謡うのは宝生だけのよ

うである。

十五、乗りも得るべき我があらばこそ(車借)

○「乗りも得べき」とあるべきであるが、観世・喜多とも「得る

べき」になっている。

十六、それを怪しめ山に入り(花月) すは我が君を怪しむるは

(安宅)

○「怪しむ」は、普通は四段活用で、「それを怪しみ」・「我が

君を怪しむ」はとありそうなところであるが、下二段活用にも用

いられたようだから誤とは言えぬが珍らしいので挙げておく。

十七、さはあるまじと申されてこそ御兄弟の御中に物いひさがなき

事あるまじ・討ち申せとこそ仰せ付けられ候らん(正尊)

さこそ嬉しと思ふべき(朝長) 我等が業こそ現なき(鳥追)

○こそに対する結びが誤っている。難波に「今こそ時の花の如

し」というのがあるが、「如し」には「如けれ」の活用はないの

だから、これは特殊なものである。又「班女」に「人知れずこそ

思ひそめしが」とあるのは、原歌の「思ひそめしか」を誤ったも

ので、観世も、「そめしが」となっておる。喜多は「そめしか」としてある。これと同様の例で「砧」に「都にこそは候ひしか」

という文句があり、宝生も喜多も「しか」になっているが、観世には「しが」となっている。なお「関寺小町」に「昔豊の明の五節の舞姫の袖をこそ五度かへしよが、これはまた七夕の手向の袖ならば」の文句があるが、これは所謂転結になっているので問題ではない。

十八、今宵三年の値遇に今ぞかへるなれと（錦木） 御経読まぬ

は理りなれ（満仲） 直なる御代のためしなれ（弓八幡）

返すく優しけれ（春卷）

○錦木のは「ぞ」に対し「然形を用い、その他は「こそ」を用いずに已然形で結んでいる。

十九、何れの所より来つて今生かくの如し（殺生石）

○観世・喜多ともに、「何れの所より来つて今生かくの如くなる」とあって、宝生の方は誤っている。

二十、山は動ざる形を現じて（春日竜神） 知る事あらば申さ給

へ（高砂） 入相こさめれ急が給へ（通盛）

○動ぜざる・申させ・急がせが約されたもの。

二十一、ばひまるらせて（鸚鵡小町）

○ばひは奪（うば）ひの略で、源氏物語などにも見えているがついでに挙げておく。

二十二、小町が許へ通うよなう（卒都婆小町）

○寛政本には「小町が許へ通はふよなふ」とあるが、仮名遣とし

ては「通はうよなう」とあるべきもの。観世には「通はうよなう」となっている。宝生ではカヨオヨノオと謡うため、昭和本では「は」が除かれた。

二十三、面白ふからんずらん（娘捨）

○寛政本も「面白ふからん」とある。観世も喜多も「面白からん」となっているが、宝生では「オモシロオ」と延ばして謡うので、「ふ」は「う」とすべきである。

二十四、鐘も聞ふる東雲に（盛久） 土佐は聞うる文者にて（正尊） 建石宿の栄うる事も建石宿の栄うる事も（千引）

栄え栄うる津の岡の（難波） 幾千代までと栄うる春の幾千代

までと栄うる春の（米殿） 栄うる御代とぞ（岩船）

○聞うる・栄うるは、寛政本・昭和本・観世本・喜多本何れもま

ちまちまになっている。「鐘も聞ふる」は、寛政本聞うる、観世本

聞ふる、光悦本きこゆる。「土佐は聞うる」は、寛政本聞ふる、

観世本聞うる。「建石宿の栄うる」は、寛政本さかふる。「栄え

さかふる」は、寛政本栄えさかふる、観世本栄えさかふる（ゆにヲと

発音の記号がある）、光悦本さかえさかふる。「栄うる御代とぞ」

は、寛政本さかふる、観世栄ゆる（ゆにヲと発音の記号がある）。

これは聞ゆるを、う音便にしたようでもあるが、中世頃以降、教

ふを教ゆ、与ふを与ゆなど言つた逆の形で、ア行ハ行ヤ行が混同

して栄ふると書かれたり、栄うると書かれたりしたのかとも考え

られる。

二十五、我が乳のあたりを御覽せとあり(海士)

○普通四段活用以外の命令形には「よ」がつけられるが、これはついていない。古く四段以外にも命令形に「よ」をつけてない例は多いが、謡曲では珍らしい。

二十六、名をさいて(摂待3) 九刀ぞ刺いたりける(鶯)

心をすまいて(三井寺) 牢より逃いてあるぞ(龍太鼓)

○サ行の動詞の「し」をい音便にすることは戦記物に屢々見えて
いるが、謡曲には割合に少ない。

二十七かまひて静かに召され候へ(隅田川) かまひて手習ひ学

問ねんころに(鶉仲) かまひて用ゐ給ふなよ(調伏曾我)

かまへて御身を慎みて(大仏供養)

○かまひてとかまへては共に用いられるが参考までに記した。観

世には、雷電・安達原・二人静・木曾に「かまへて」がある。

二十八、人違ひにて候べし(鉄輪) 人違ならば(烏帽子折)

人たがへにて候べし(鉢木)

○ヒトタガイ・ヒトタガエ双方見えてはいる。

二十九、以下清濁に関するものを記す。

(みづ)からが名をもくだし(鳥追) なき人の名をも朽だし

(摂待) 千行の悲涙袂を朽だし(景清) 家人と下すかや

・家人と下すとも(春栄)

○朽だすは正しくは「くだす」で、観世では「朽」の方は「くだす」、
「下」の方は「くだす」と区別している。

(も)とより好む大長刀真中取つて打ちかつぎ(橋弁慶) かつ
ぎの海士の・かつぎ上げしも・彼の玉をかつぎあげし所を(海
士)

薄衣かつかせ奉り(橋弁慶) へりぬりとして打ちかつぎ(柏

飾)くれなるの袖をうちかつぎ(范田) 狩衣の袖をうちかつぎ

(横山) 烏帽子引きかつぎ(百万) 御小袖を引きかつぎ

(巴) 薄衣引きかつぎ(夜討曾我) 薄衣猶も引きかつぎ

(橋弁慶) 引きかつぎてぞ(道成寺) 狩衣の袖をうちか

づいて(卒都婆小町) かつける衣は(雲林院)

○最初の橋弁慶の「真中取つて打ちかつぎ」は、かたげる意故
「かつぐ」でよいが、他はすべて「かつく」であるべきを、海士
の分だけかつぐになっている。観世はすべて正しい読み方になっ
ている。

白苦しみを免かる(巻組) 免るゝによしなしと(大蛇)

黄泉の道をも免かれうずると(感陽宮) 剣の實めのまぬかれ

て(俊成忠度)

○語原はともかく、古くから「まぬかる」と清音で言われている
が、現代は「まぬがる」と書かれることが多い。謡曲ではすべて

清音である。

鶴かゝる調めの・いかで調めの・我彈丸が調めも(彈丸)

調めをなして(西王母) 秋の調めや(狸々) 小督の局の

御調めをば・小督の局の御調めにて候・玉琴の調めはかくれなき
ものを・調めは隠れよもあらじ(小督) 手向の琵琶を調むれ

ば(経政) 祖父は琵琶を調むれば(絵上) 糸竹の調へ(娘

捨)

○「調」は今日は専ら、シラベ・シラベルなどバ行に言つておる
が、謡曲はシラメ・シラムなどマ行に言う。寛政本は「しらへ・
しらふる」とハ行の仮名で書いてあるが、謡う時はマ行にいう。

「娘捨」は昭和本も「しらへ」と書いてある。これは昭和本で
も、娘捨・関寺小町・檢垣など所謂三老女のような曲は特別の
免し物として、殆ど寛政本の文字を改訂しなかつた名残である。

○「煙」の如きも、寛政本で仮名書のところは「けふり」とあ
り、謡う時は「ケムリ」と謡うのである。

（いづくの春もおしなへて(田村) 知るも知らぬもおしなへ
て(誓願寺) 光も影もおしなへて(娘捨)

○前条の「調」と同じであるが、この方は「め」と改めずにも
とのままにしてある。謡う時にはオシナメテで、観世も同様であ
る。田村と誓願寺とは「へ」の右にメとつけてある。

内人をえらはせ給ふかや(羅王) 諸人の中に選ばれて(昭

君) おととひえらはれ参らせつゝ(松風) 千載集を撰は

る(忠度)

○これらは皆エラワセ・エラワレ・エラワルと清音で謡われる。
観世も同様である。但し羅王の曲は観世にはない。

○因みに、連用形などには「えらみ」である。

彼を選みて(昭君)

（千早振る神ぞ久しき(松尾) 千早振神に歩みを(加茂)

千早振る神のお庭の(田村) 千早ふる神の御代には(弓八

幡) 千早ふる神のまに(放生川) 千早振る神も願ひ

の(三輪) 千早ふる神遊び(弓八幡) 千早ふる神代の歌

は(俊成忠度) 千早振る神代を聞けば(絵馬) 千早振る

天の岩戸を(三輪) 千早ふるなりあま処女(放生川)

千早振る其神山の(加茂物狂)

○この語普通にはチハヤブルであるが、宝生流はすべてチワヤ
ブルと謡う。観世はチワヤブルである。

（天さがる日の経緯に(大江山) 天さがる鄙人なれば(実盛

・求塚) あまさがる鄙に残りて(殺生石) 天さがる鄙の

境に(養老) 天さがる鄙の住居の(生田敦盛) 天さがる

鄙の長路に(桜川) 天さがる鄙の長路や(大江山)

○この語は、天離るでアマザカルと読むべきであるが、宝生はす
べてアマザガルと謡う。天下がるの連想からかと考えられる。

観世ではアマザカルである。

内雲にたくへて夥し(般) 天に響きて夥し・浪に類へておび

たし(頼政) 稲妻震動おびたし(大江山) その罪お

びたし(鶏飼) 額の声もおびたし(額)の声もおびたし

(那那) あら夥しの軍兵やな(夜討曾我) 何夥しう上る

とや(鉢木) 天地に聞えておびたしや(小鍛冶) 天狗倒し

はおびたしや(鞍馬天狗)

○普通はオビタダシであるが、謡曲では宝生観世ともオビタダシと謡う。

(竹光庭字をかゝやかし(西王母) 眼は雲路にかゝやき(当

麻) 花の光かゝやき(嬭捨) 暁月軒にかゝやき(上宮太

子) 花の貌かゝやき(卒都婆小町) 天にかゝやき(鍾馗

・西王母・草薙・小鍛冶) 朱の玉垣かゝやきて(竜田)

照りかゝやきて(大江山) 光にかゝやきて(殺生石)

花の光にかゝやきて・出でたる月のかゝやきて(田村) 日月

光かゝやきて(竹生島) かゝやき出づる日神の(絵馬)

月にかゝやく乙女の袂・光もかゝやく金銀珠玉を(竹生島)

夕月の上にかゝやく玉殿に(天鼓) 姿もかゝやく威勢に恐れ

て(張良) 光かゝやく春の日の(大仏供養) 天にかゝや

く稲光(最界) 夕月かゝやく玉座のあたり(天鼓) 光か

ゝやく玉の輿(那那) 色もかゝやく衣を着(杜若) 堂前

にかゝやく稲光(舍利) 内はかゝやく灯の(錦木) 日月

光かゝやけば(三輪) 金銀を磨きて輝けり(威陽宮)

○普通「かがやく」であるが、謡では宝生観世共カカヤクと清む。字鏡には「加加也久」とある。

出聞けば姿もたそかれにかげろふ人は(江口) たそかれにほ

のく見えし(半徳) たそかれにたゞずむ影はほのく(と

江口) をりふしたそかれにほのく見れば(班女)

たそかれ月も(雲林院) たそかれ時の(半徳)

○「誰そ彼」の義からの語であるが、現在は「タソガレ」と濁る。謡曲では宝生観世とも「タソカレ」である。

ゆさもいちしるき神体の(葛城) 高名いちしるく(般)

○普通イチジルクであり、観世もイチジルクであるが、宝生は清む。

ゆ袖ひちて(氷室・放生川・養老・飛鳥川)

○濡れる・ひたすの意の「ひづ」は濁音であるのを、宝生は清む。観世は濁る。

ゆわきもこが寝ぐたれ髪を(采女2) 寝ぐたれ髪を(采女)

○一般にはワギモコがネクタレガミヲとされているが、ワギモコは宝生はワギモコ、観世はワギモコ、ネクタレガミは宝生観世共にネクタレガミと濁る。

ゆ夕ざれば野への秋風身にしてみて(融)

○「夕ざれば」の清濁が反対になっている。観世は「夕ざれば」

である。

(内水かけ草ならば波うち寄せようたかた(礎))

○水陰草(みづかげぐさ)を、水かけ草と仮名交りにかゝれたのを、「かけ」をそのまま清んで謡つて来たのであろう。観世流改訂本刊行会の本には「水陰草」と書き、ミツカゲグサと仮名名がしてある。

(ゆ敬ぜしよりこの方(服) 三宝に供養し奉る(自然居士)

善を賞じ(放生川)

○字音で読む語がサ変の動詞になっているものの中、普通に清音で言われるものを宝生で濁音にしているものを挙げた。観世では右の何れもが清音になっている。「ン」から連なる時は多くは濁音になることは一般と同じである。

花散じ葉落ちて(関寺小町)

武蔵が参じて候(船弁慶)

土屋が参じて候(盛久)

妙なる心を感じる故に(蟻通)

身を観ずれば(大原御寺)

是を撰ず(忠度) 選ぜられける程に(兼)

「ン」に連なるものでなくても、次の様なものは一般にも濁音である。

山も動ぜず(竜田)

及第のみぎんに亡ぜし・我と亡ぜし悪心

を(鐘馗)

(内きりはたりちようくと(呉服)

谷の水音撃々と(養老)

荒らかにどうくと踏みならし(橋弁慶)

甲の真向ちやうど打ち(鱈戸) 甲の真向丁ど打ち(通盛)

はつたと打てばちやうど打つ(小鍛冶) ちやうど打てば(正

尊) ちやうど切れば(大仏供養) ちやうど斬れば(熊

坂) ちやうど切れば(土蜘蛛) ちやうど打ち重ねた

る槌の響き(小鍛冶) 船のうちよりていとうどうちつれて

(自然居士) 足踏はとうくと(歌古) いつも太鼓はと

うくと(鳥追) 伐木丁々として(山姥) 呂水の波は滔

々々(天鼓) 水滔々として(采女・天鼓) 山の井の水滔

々々として(養老) 浪の鼓どうど打ち(狸々) 波を響かし

どうど打つ・花を散らしてどうど打つ(難波) 両馬があひに

どうど落ち(忠度) 二疋があひにどうど落ちつるが(実盛)

馬より下にどうど落ち(拱待) 馬より下にどうど落つれば

(八鳥) どうどふす(鱈戸) 寄せては岸にどうどは打ち

(自然居士) 矢坪をさしてひようど放つ(拱待)

○「と」「ど」に連ねて副詞をなすものであるが、最初の三例は「と」であるが、他は全部「ど」である。観世はすべて「と」である。

ゆ色に出ですはそれぞとも(班女) 此生に浮ますは又いつの

世をまつの戸の(当麻) 此身を浮かめずはいつの時か(天

鼓) これを聞かずは生々世々永き世までの(夜討曾我)

狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ(隅田川) それ其花と答

へずは(半蕨) さらずは敵に渡さじとて(八島) 知らず

は此里人に(巴) 染めずはいかがいたづらに(芭蕉)

杉の立ちどを尋ねずは古川のべに・杉の立ちどを尋ねずは古川の

べとながめける(玉葛) 寄りもつかずは聴衆の場に(実盛)

御命に代り申さずは弓矢の家の名ぞ惜しき(満仲) 今此事を

歎かずは(是界) 末の闇路をはるけずは今あひ難き(芭蕉)

げにや親子の道ならずははるけき旅をいかにせん(桜川)

我先立ちて紅葉せずはいかで妙なる御詠歌にも預るべき(六浦)

都に帰り忘れずは亡き跡弔ひてたび給へ(通盛) 一曲なくは

かくぞとも(蟬丸) 舟より御下りなくは拷訴致さう(自然居

士) 鳥御追ひなくは此家をあけて(鳥道) 今はまだなれ

これなくは忘るゝ隙もあらましものを(班女) 真信心私なく

はかほど群集の其中に(百万) めされまじくは御心ぞとよ

(雲雀山) 唯然るべくはよきやうに申し(熊野) 三世の

利益同じくはかく刑戮に近き身の(盛久)

○今日では皆「ば」と書かれるところである。以上親世も「は」

である。

ただ「加茂」に「清流川の水波まは」は親世では「水波まば」と

なっているが、光悦本と宝生寛政版は「水くまは」としてある。

ここの文章は「清流川の水くまは高根の深雪とけぬべき朝日待ち

るて波まうよ波まぬ音羽の流波はうけてかしらの雪とのみ戴く桶も身の上と誰も知れ老いらくの暮るゝも同じ程なさ」とあるので「水くまは」は、「清流川の水隈」と「音羽の流波」と対に書かれたのではないかと思う。それならば前記の「は」とは違うわけである。

○清濁について記したついでに、「凍じ」の語は宝生はササマジであるが、親世はすべてササマシと清んで謡うことを附記しておく。

三十、以下特殊な読みものを挙げる。

(一)頼みもあやうからぬ(土車) 危うきかけちの(護法)

心も危うき此鼓(天鼓) 危き心は(草紙洗) 危き美女御

前の(満仲) さなきだに危きは(竜田) 御命もあやうく

見えさせ給ひて候(楊貴妃) 既に危く見え給ひしに(八島)

御命も危く見え給ひて候(鉄輪) 危しの御事や(石橋)

捨刀も危しや(禅師曾我) 危しや目もくれ(石橋)

○謡う時はアヨオク・アヨオシと謡い、親世も同様である。「う」

は「ふ」とかくべきで、親世は「ふ」となっていることは始めに

記した。

(二)晨鐘夕梵の響絶ゆることなし(老松)

○絶ゆるをトオルと謡う。親世も同様である。「竜田」に「氷に

も中絶ゆる名の」の如きはクユルと謡う。

○恐れ多き申し事にて候へども(鳥追・船弁慶) 恐れながら

(西行桜・須磨源氏・雑波・錦戸・夜討曾我) 以上はセリフ

のところ。

恐れながら(小杵・百万) 御言葉を返すは恐れなれども(熊

野) 以上は節付のあるもの。

○宝生は以上皆「恐れ」をオオソレと謡う。しかし、衣に恐れて

(自然居士) 恐れ給はば帰らんと(野守) (何れもセリフ)

長居は恐れあり長居は恐れありと(盛久) (節付がある)などはオソレである。

観世はセリフの場合は殆んどオソレで節付のあるところはオオソレと謡う様である。ただ西行桜の「恐れながら」だけは、セリフであるがオオソレと仮名がつけられている。

○仰せまでもさむらはず(撰待) 仰せまでもなし(松虫)
狂へとな仰せありさむらひそ(班女) この花とこそ仰せある

べきに(弱法師) 狂へと仰せある人々こそ(班女)
○以上何れも宝生では「仰せ」をオセと謡うが観世はすべてオオ

セである。尤も宝生も右記の外はオオセである。例えば、
実平仰せ承り(七騎落) 仰せ畏つて承り候(志賀) うた

ての仰せ候や(高砂) 皆オオセで、この方は非常に多い。
○言ひかひなき者と・長田言ひかひなくて(朝長) 言ひかひ

なき者の(船弁慶)

○「言ひ」をユイと謡う。寛政本は、どれも「ゆひ」と仮名で書いてある。観世は、船弁慶には「いひかひ」と書きユイと謡い方を示してある。

これは「言ふ」をユウと言ったのが、更に「言ひ」に及んだものである。この逆に、宝生では夕べ・夕煙など皆イウベ・イウケムリと謡う。而も「夕」を「言ふ」に掛詞にしたものが非常に多い。

ただ「梅枝」に「女心の乱れ髪ゆひかひなくも恋衣の」の句がある。これは「髪をゆふ」と「言ひかひ」とを掛詞にしてあるのだが「ゆひかひ」と書いている。

尤も「結ふ」は、ゆふ・いふ共に使われており「大蛇」には「さすき八間を結び置き」の句があり、そこではイイオキと謡う。

田刻へ泡仰の(加茂・桜川)

○「剩へ」はアマツサエと謡う。現時は促音にせずアマツサエと言っているが、この語は、「あまらさへ」の促音便だからアマツサエが正しいわけである。字音では、月雪烈吉などゲツ・セツ・レッ・キツがゲツ・セツ・レッ・キツなどとなることは常であるが、アマツサエの例は珍らしいのでついでに記した。

「あまっさへ」の約されたものに「あまさへ」がある。

取らであまさへ神々の(鉄輪)

丙 上記の他に一寸目立った語句を列挙する。

一、宮居給ひし(加茂物狂) 東帯給へるをのこ(雲林院)

○「給ふ」は普通動詞に連ねて用いられるが、これは体言に連なっている。

二、水にひたしてすゝみとる(加茂)

○「すゝみとる」は、涼みをいれる意。

三、ひとりと進める武者(錦戸)

○唯一人となって進んで来る意。

四、誤つてうちせぬ(梅枝)

○観世は、「あやまって討たせぬ」となっている。

五、時にとつての祝言申すはかりなく候(小鍛冶)

○「はかり」は、限りなどの意で、平家物語卷十二、六代の篇に「余りに思ふはかりもなかりつるに」同灌頂の巻、女院御出家の篇に「かなしともいふはかりなし」の句がある。一般の平家物語には「ばかり」と濁っているが、野村宗朔編の平家物語には消んでいる。後例は「ばかり」でも通するが、前の方は「ばかり」では落ちつかぬ気がする。小鍛冶に消んでいるのは正しいと考える。観世では「時に取つての祝言なり」となっている。

六、白粉を絶えさず(卒都婆小町)

○宝生ではタエサズと謡うが、観世は改訂本に「え」の右方に「ヤ」と振仮名をしている。光悦本も「たえさず」となっている。

七、誰そやう花折るは(雲林院)

○「や」に「う」を添えて延ばし、タソヨオと謡ったもの。観世も同様である。

八、名もなつかしき花の散りをあだにもせじと(桜川)

○「散り」を「塵」にかけたもの。

九、俗呼ばつて女郎とす(女郎花)

○「呼ばる」という四段活用を用いたもの。「俗」は宝生ではシヨク、観世ではソクと謡う。

十、思ひを雁山の夕べの雲に馳つす(俊成忠度)

○「はす」を促音にしている。観世も同様

十一、百夜までと通ひ往て(卒都婆小町)

○「往きて——往つて」が約されたもの。寛政本と観世は「通ひて」と仮名書になっている。観世でも、観世流改訂本刊行会の謡本では、本文は「通ひて」とし、「ひ」の右方にイイと附し、節の方で延ばして謡うようになっている。

十二、居住仕つて候(松垣)

○「仕つて」を、ツカマアツテの如く謡う。寛政本には「居住つかまつて候」と書いてある。「つかまつて」から転じたらしい。観世にも「居住つかまつて候」とある。

十三、日本一の剛の者とぐんでうざよとて(実盛)

○光悦本「くんしやうすよ」、観世「ぐんじやうすよ」とある。

謡曲大観に、平家物語の原文に拠つたものであるが、この解釈については、「組んで失すよ」「軍上手よ」「組んで落すよ」「組まんとするよ」など、古来諸説あつて決し難いが、ここでは「組んで失すよ」と解した方が適當であらうと思ふ。とある。

十四、何れの日を経てかはす事を得ん(紙王)

○「経て」はエテと謡う。

猶胡蝶に「されば春夏秋冬を得て」の句があり、寛政本には「へて」と仮名書にしてあるが、謡う時は「エテ」であるので、昭和本には「得て」とされた。親世は「へて」である。

十五、古今の色を見ず(高砂)

○親世では「見ず」と打消しになっている。「見ず」ならば、古今変らぬ色を見せている意で、「見ず」ならば、古今を通じて変つた色を見ないということになり、結局同じ意義となる。

十六、其人買船の事さうよ・其船漕ぐ楯の事さうよ(自然居士)

まことさうか(摂待) なんぼう無念の事さうぞ(録木)

盗人ぞうな(安宅)

○さう・ぞう皆ゾオと謡う。右のうち「楯の事さうよ」は寛政本に「候」が書かれている。謡い方はやはり「ゾオ」である。親世は全部「さう」と書いてある。

この「さう」は「さふらふ」の約故、正しくは「さふらふ」と書くべきであるが、謡本には右の通りになっている。ただ「安宅」の場

合、光悦本も親世も「さう」であるが、宝生は、寛政本も昭和本も「ぞう」になっている。「ぞな」を延ばしたものと見たのであろうか。

十七、阿弥陀仏やなまふだ(百万)

○アミダブヤナモオグと謡う。「なまふだ」は南無阿弥陀仏の約で、大言海・大辞典などナマウダの仮名になつており、親世も、「なまうだ」としている。

十八、謡曲には呼掛のなう(ノオ)が非常に多いのであるが、「なうく」の場合と「なう」の場合とがある。なおこの「なう」が他の語に結びついて用いられるものと語句の終りにつくものとがあるのので、便宜ここに辨めておくこととする。「なう」の仮名については、前記甲の八に記した。

(一)なうくあれなる御僧(江口・杜若・定家・東北・三山)

なうくあれなる御僧に(善知鳥・熊坂) なうくあれなる

旅人(烏帽子折) なうくあれなる旅人に(鍾馗・藤)

なうくあれなる旅人は(練捨) なうくあれなる山伏は

(爲城) なうくあれなる(小鍛冶) なうく安居院の

法印に(源氏供養) なうく幼き人は(摂待) なうく

女郎花と申す事は(女郎花) なうく御僧は(胡蝶・六浦・

頼政) なうく客僧連(安宅) なうく此冠唐衣(杜若)

なうくこれなる石塔(定家) なうくこれなる鼓は(籠太

鼓　　なうくこれは(雨月)　　なうく自然居士(自然居

士)　　なうく斬く(春栄・草紙洗・楳風)　　なうく其舟

に(兼平・項羽・楳風)　　なうく某御舟より(七騎落)

なうく旅人(録木・求塚・山姥・頼政)　　なうく何とて皆

々物をば(撰待)　　なうく俄に村雨のして(熊野)　　なう

く花若殿(鳥追)　　なうく望月が(望月)　　なうく遊

行上人の(遊行柳)　　(なうあへの向ひの(隅田川)　　なう何れも女は(梅枝)

なう鷄鷄返しと(鷄鷄小町)　　なうお主の命に代る事(満仲)

なう御僧(求塚)　　なうきこしめせ(国栖)　　なう心が乱れ

さむらふぞや(籠太鼓)　　なう此機召され候へ(草薙)　　なう

此鼓を打ちて(籠太鼓)　　なう御芳志に刀を(春栄)　　なう

これは夢かや(隅田川)　　なうこれは物には狂はぬものを(三

井寺)　　なう五郎殿(夜討曾我)　　なう逆髪こそ(弾丸)

なう自然居士(自然居)　　なう上人(三山)　　なう親類とて

も(隅田川)　　なう水波の隔と聞く時は(大仏供養)　　なう

其石の辺へな立ち寄せ給ひそ(殺生石)　　なうその鶴使こそ

(鶴飼)　　なう其川な渡り給ひそ(菟田)　　なうその衣は

(羽衣)　　なうその言葉は(隅田川)　　なう其子は(桜川)

なうその下人をば(巻組)　　なう其時に(撰待)　　なう其花

なう折り給ひそ(女郎花)　　なう其船へ(自然居士)　　なう其

宮軍の(頼政)　　なうその盲目なる乞食こそ(景清)　　なう

それは何とて(藤栄)　　なう唯今の(隅田川)　　なう旅人の

(絁上)　　なう道理は(項羽)　　なう猶も人は(藤戸)

なうはや目の暮れて候程に(卒都婆小町)　　なう富士は(富士

太鼓)　　なう舟人(隅田川)　　なうみづからこそ(景清・

楳風)　　なう村雨の(雨月)　　なう物たべなう(卒都婆小町)

なう渡り候か(録木)　　(げになう言葉多き者は(吉野静)　　げになう忘れてさむらふ

ぞや(松風)　　偕なう我が子を・さてなう我が子を(藤戸)

何なう清見が関の者と(三井寺)　　何なう都の人と(吉野静)

よしなう人は(花筐)

(四汝に仰せありしよなう(小鍛冶)　　あまたかはりてありしよ

なう(氷室)　　通りし事のありしよなう(遊行柳)　　昔にか

はらぬ色よなう(野宮)　　恋路によりたる謂よなう(縮木)

これまためでたき詠歌よなう(関寺小町)　　下り給ふも縁よな

う(桜川)　　小町に心をかけし人は多いよなう・小町が許へ通

うよなう(卒都婆小町)　　手習ふ人の始めにもすべき由聞え候

よなう(関寺小町)　　由緒ある木にて候よなう(葛城)

我は物に狂ふよなう(三井寺)　　母とても尋ねぬよなう(隅田

川)　　聞きも及ばせ給はぬよなう(縮木)　　花の春になるよ

なう(三山)　　左右なう渡らぬ橋よなう(石橋)　　唯手を合せ

て舟よなう(俊寛) 譬喩品よなう(東北) 面目なきよな

う(志智) これ僧にあらずと申し候よなう(三笑) 放生

会とかや申すよなう(放生川) なう物たべなうお僧なう(卒

都婆小町) 一人当千の武士よなう(摂待) 笠といふもの

よなう(卵丸) 粟草喩品よなう(定家) 慰む事もあるべ

きになう(鉢木) 人は知らじとなう(藤戸) 我が子たべ

なう(百万) 父たべなうとて(摂待) 御膳の贅の網はま

だ引かれぬよなう(阿漕) 便船申さうなう(兼平・項羽・竹

生島) お宿参らせうなう(鉢木・山姥) 命は無量寿仏と

なう(実盛) 所によりて変るよなふ(芦刈) 丑寅に当つ

て候よなふ(兼平)

最後の二例の「なふ」となっていることは、甲八に記した。

以上体言以外のものについては大体まとめた。体言のものにつ

いては、便宜一二記したところもあるが、これは後日記すことと

する。

補記 本文中に書き落したので補記する。

○時の完了の「たる」が、現今の「た」になっているもの。

拜まい給ふたか(函栖)

(昭和三十九年十月三日記)